石かわ
第111号
発行者
退職校長会石川支部
冨岡高春

「いつも笑顔で人様と接していますか」

副支部長　田口和憲

過日、福島県退職校長会二本松大会に参加する機会を頂きました。講師の女優大山采子（一色采子）さんの「生きることは演じること」「演じることとは、いつも笑顔で人様と接すること」というお話が心に残りました。

私は令和二年の十二月より社会福祉法人桜が丘学園で運営のお手伝いをさせていただいています。当法人は福祉型障害児入所施設桜が丘学園と障害児通所支援事業所エンジェル園、障害者支援施設の愛生園と共生園の四つの施設を有し、五歳のお子さんから古希を迎えた高齢者まで、それぞれの施設で百名を超える老若男女が暮らしています。

私の執務室は学園と愛生園のある施設の中にあり、多くの利用者さんと接する機会があります。勤務当初は折しもコロナ禍真っ只中にあり、マスク越しで私の表情などもわからない状態での出会いだったせいもあり、話しかけても用心深い目で見られるだけでした。ある時、マスクを外し、笑顔で話しかけると利用者さんの表情も変わってくるのがわかりました。少しずつ声をかけてくる利用者さんも増え、（利用者さんの発する言葉は、おはよう、元気だよ、明日も来るの？水分とったか？など、いつも同じ言葉の繰り返しが多いのですが）、自分もこの施設の一員となったなという気持ちになりました。そして、改めて今回大山采子さんの「笑顔で接していますか」という言葉に自分の日常を振り返る機会をいただいたような気がしました。

教育情報

ふるさとに誇りを持たせる教育

浅川町教育委員会教育長　真田秀男

現在、地方から東京圏への人口流出が進み、地方では人口減少、高齢化が一層進んでいます。その結果、地域の経済や社会保障などにも影響が及び、過疎化による集落の維持も危惧され、政府は平成二十六年、東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけるため地方創生政策を打ち出しました。

福島県では、令和四年度に策定した「第七次福島県総合教育計画」において、「福島ならではの教育の充実」を掲げ、「福島で学び、福島に誇りを持つことができる『福島を生きる』教育」を目指しています。ここで言う「福島」とは、一人一人の子どもが生まれ育った「ふるさと」です。子ども達が学び、生きるふるさとしての「ふるさと教育」にどう取り組むか、浅川町の例を述べたいと思います。

毎年八月十六日に行われる「浅川の花火」は、福島県内の花火大会としては最古の歴史があると言われています。江戸時代に町内の旧家が花火を作成するための秘伝帳を作り、各家が競って打ち上げていたこと、荒町・本町の青年会が自ら花火を作成し打ち上げていたこと、昭和三十六年から始まった、打ち上げずに城山の山頂付近で破裂させる「地雷火」を現在も行っていることなどが、他にはない大きな特徴です。花火大会は現在も青年会が打ち上げ作業を担っており、伝統を守り継ぐ彼らの情熱溢れる活動を目にした町内の小学生の中には、将来、「浅川一の花火師になりたい」と夢を持つ子どもも育っています。

このような伝統文化や町の「宝」を総合的な学習等に積極的に取り入れていくことは、ふるさとを誇りに思う心を育てる上で極めて大事であると考えます。町内の小中学校では、青年会会員を講師に花火の授業を行い、実際に花火を打ち上げてみせることを行っています。

この事例からも言えるように、身近な教育資源を活用した「ふるさと教育」は地方創生の第一歩であると私は考えます。地方創生は企業誘致だけではありません。

地域は教育資源の宝庫です。今、戦後最大の教育改革と言われる中で、教師が地域の教育資源に目を向ける余裕がなくなってきているのではないでしょうか。このような時こそ一歩立ち止まり、ふるさとの豊かな自然、文化、伝統、偉人などに改めて価値や魅力を見出し、子ども達と共有していただきたいと思う今日この頃です。

「将来の夢」（新聞より転載）

県大会参加報告

「生きること・・・」

相樂正弘

令和六年六月十二日、県内十六支部から二百二十名の退職校長会会員が集い、創立六十年記念、第五十八回県大会二本松大会が二本松御苑を会場に開催されました。

午前の部は、式典に続き「生きることは描くこと、生きることは演じること～大山忠作とわたし～」と題して、大山忠作氏の長女で女優（一色采子）として活躍されている大山采子様よりご講演をいただきました。大山忠作画伯の生家は、現在の二本松市根崎で染物屋。幼児期に過ごした安達太良山と阿武隈川に囲まれた自然環境の中に絵描きとなった土壌があった。忠作の父に漢詩を教わったこと。養子に出され、士官学校を受験させられたが、不合格になりたくて試験用紙の裏に絵を描いていたこと。内緒で東京美術学校（現　東京芸術大学）を受験・合格し、養子縁組を解消されるほど絵が好きだったとのこと。しかし、第二次世界大戦の学徒出陣により、特攻隊員を志願したが、乗船していた船が沈み、九死に一生を得て復員することとなった。どうせ拾った命、好きな絵だけを描いて生きていこうという思いに至る。東京都美術館で開催中だった第一回日展を見て感動し、制作意欲を掻き立てられ、第二回日展では初出品し初入選となり、以降は落選知らず。描きたい物を描くという姿勢で、人物から宗教、花鳥、風景画まで幅広い題材の作品を発表し続けた父の後ろ姿に影響を受け、女優になった経緯・生涯をかけて「演じる」意味の講演には感銘を受けました。

午後の部は三支部からの体験発表でした。最初の発表は「石川町立歴史民俗資料館（イシニクル）移転オープンにあたって」と題しての石川支部の小針良仁氏でした。はじめに歴史民俗資料館の見学にあたっての導入映像による紹介が行われました。退職後、歴史民俗資料館の調査員として老朽化した施設の移転に参画し、石川町の通史と鉱物の関わりを対比できる展示とするというコンセプトのもとオープンを迎えるまでの経緯の発表がなされました。耶麻支部の神田優子氏からは、平成十八年の一市二町二村の合併により誕生した新喜多方市の人づくりのよりどころとなる指針の策定に退職校長が参画した経緯の発表がなされました。いわき支部の矢内金五氏からは、退職後、社会教育指導員として阿武隈高地の魅力を探求する機会の話題。「富士山の見える阿武隈の山々」と題して「日山」「三株山」の紹介がなされました。

二本松大会に参加し、校長退職後のライフワークとして、「趣味・特技を生かした生活」ということが心に深く刻まれる一日となりました。

次年度県大会は、令和七年六月十日「南会津大会」となり、南会津町田島地区にある御蔵入交流館において開催されます。

祝　喜寿・金婚

西牧敏幸

支部総会において、喜寿と金婚を祝っていただき、会員の皆様には深く感謝申し上げます。

私は、団塊の世代で石川町生まれ、石川町育ちです。

平成二十年三月定年退職後は、石川町の祭り（石都々古気神社例大祭）で新町氏子総代六年、行政区長六年計十二年地域住民と協力して関わってきました。現在は、顧問をおおせつかっています。

先日、学法石川高野球部が三十三年ぶりに第九十六回選抜高等学校野球大会に出場することになりました。元気をもらおうと家の前に大きな文字でメッセージを貼りだしました。すると、NHKの取材がありました。「応援している様子を取材したいのでよろしくお願いします。」とのこと。

三月八日午後六時十分以降のNHK「はまなかあいづ」で妻と二人で法被を着ての応援スタイルで出演し、放映されました。

金婚の思い出となりました。

祝　金婚

冨岡高春
ケイ子

金婚を迎え、五十年間、共に生きてきたことを、二人の子どもの年齢、孫五人の成長の姿から改めて実感し、長き歴史を振り返っています。苦楽を共にした日々、感慨深くお互いに「感謝」の一言です。

仕事に没頭した現職時代。我が子には寂しい思いをさせたと反省。今はその分、孫達の生活を優先に送迎、食事作り、会話等と孫育てに勤しみ癒やされ、充実した生活です。

お互いの健康維持、そして共有した時間を持つことも大切だと思い過ごしています。

趣味の書道も二人で切磋琢磨・練習に励んだり、小旅行でリフレッシュ、家庭菜園や

庭の手入れも二人の時間として楽しんでいます。

また、地域・人との関わりを大切にしたボランティア活動（地域貢献、読み聞かせ等）や所属諸団体での活動は、忙しさの中にも交流の楽しさ、生きがいを感じています。

今後とも共に健康で充実した人生を送りたいと思います。

「健康長寿」を考える

内田賢壽

健康寿命を維持するためには、バランス良い食事、適度な運動、社会性の維持が大切であると言われています。

しかし、注意していても防げないものがあります。過日、緑内障の手術を受けました。十年近く目薬だけで治療してきましたが、視野が狭くなり手術が必要という診断を受け決断しました。緑内障という病気は目の眼圧が高くなり視神経をつぶしだんだんに見えなくなっていく病気です。また手術で治るという病気でもありません。ただ進行を遅らせるだけです。手術というのは、眼球に六ミリメートルの穴を開け、眼圧を下げるというものです。一時間ほどかかりました。

医師の説明では、今の医療の目標は「人生百年」を考えているということです。今、手術をすることで進行を遅らせることができ、長い目でみれば失明を防ぐことができるということです。

なぜ自分が緑内障になったのか、原因は分かりません。病気というものは、自分で気をつけていても、ゆっくりとまた突然とやってくるもののようです。生きている限り避けられないものなのかも知れません。ならばその病気に対処していくことが大事なのだと考えます。

趣味でゴルフをやっています。年齢に応じて体を動かす、鍛えるということでは最高のスポーツです。しかし、精神面で課題があります。朝、意気揚々とゴルフ場に出かけますが、帰りは意気消沈で帰ってきます。この大きな障害をなんとか解決することが、精神的に健康であるために必要であると考えています。

健康寿命維持のために、さらにいくつかの課題が現れることと思いますが、それらに前向きに対応していきたいと考えます。

哀悼

鈴木英夫先生を偲んで

奥貫四郎

鈴木先生が石川小学校長に着任され、初めに職員に話されたことは「命の大切さ」でした。児童の安全管理を最優先に考え、さらに個性を延ばし、学習意欲を高めることの重要性を熱く話されました。

鈴木先生は、「やってみせ、言って聞かせ、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ」と、常に話され、職員へ細かい気配りをされていました。私も教頭として三年間お仕えし、より良い学校経営の在り方、職員への接し方等々について学ばせていただきました。

平成二年十二月に「全国小学校合奏コンクール」において最優秀賞を受賞することができたのも、山本五十六長官の名言を根底にして、指導者の意欲を高め、合奏部の子供たち一人一人に寄り添う姿があったからこそと思われます。

ご退職後はご実家のお寺の整備に努められ、境内は草花で彩られ、地域の拠りどころとなっていました。

ご冥福をお祈りいたします。

新入会員あいさつ

二平光明

定年が延長され、新しい働き方が導入されたところですが、三月末に浅川町立浅川中学校で退職いたしました。コロナウイルス感染症が五類に移行になり、最後の一年間は、以前と同様の教育活動を行うことができるようになり、子どもたちの笑顔があふれる姿に、ほっとしたところです。

四月からは、浅川町教育委員会に勤務しています。「ふるさとを愛し、夢とこころざしを持った、思いやりのある浅川の子（町の目指す子ども像）」に近づくよう、園・小・中学校と連携を深め、日々やりがいを感じて働かせていただいています。

今回、石川地区退職校長会に入会させていただきました。教員生活の多くを石川地区で過ごし、これまで先輩の皆様に支え励ましていただき感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

《すこやかライフ》

私のすこやかライフ

塩田正信

表題をいただき、改めて言葉の意味をスマホで調べてみた。

○「すこやか」①体が丈夫で元気なさま②心身が健全であるさま

○「ライフ」①生活②くらしとある。

「ライフはわかる。が、「すこやか」の②は、言うは易し。この機会に、心身が健全な生活を送っているのか、考えてみることにしよう。

まず「身」が健全であるか。この世に生まれ落ちたときに与えられた定命とはいえ、健全な生活を送るに越したことはない。暴飲暴食を慎み、早寝早起きを心がけ、適度な運動、ストレスのない生活…、老いと共存しながらも、まあまあ及第点というところか。

問題は「心」が健全であるか、これである。自分で健全であると思うこと自体すでに不健全であるかもしれない。まして、他人から見ればなおさら・・・ということもあり得る。ならどうする？。健全であるかどうか絶えず自己評

価しながら生活するのもストレスフルだしできっこない。

それならいっそ、感情の赴くまま、いや、もう少し高尚な表現で、「自分の心に正直に」生活してみよう。心が望まないことは無頓着にして。そしてその際、新しいチャレンジはハードルが高いので、今までの自分の殻からほんの一歩でも出る行動を心がけてみよう。選択した行動がこれまでと同じなら、不健全であったことは不健全のままということになるのだから。

例えば、

・辛党であるが少しは甘い物も…

・門外漢ではあるがたまには芸術鑑賞も…

・買って食す野菜だったが少し作ってみようか…

といったように。新しい感動に乾き放しの心も少しは潤うことだろう。心が動けば、体も動き、心身ともに活性化するかもしれない。

わが人生ライフも四季に当てはめればもうすでに冬。すこやかライフは必須アイテムだ。原稿依頼によって得られた自分の日常への立ち止まりを大切にしていかなければならない。

とはいえ、具体的な行動に移さなければ、心身ともに不健康なまま。本原稿の提出を機に、すこやかライフの確立に向けた言行一致の実践を自らに課すことにしよう。

私にとっての すこやかライフ

芳賀　徹

私は、まだ現役で勤めておりますので、ゆっくりと趣味に興じる時間もないのが現状です。「すこやかライフ」というお題をいただいた時、何を書こうかなと悩みましたが、持病を持っている私にとってのすこやかライフは、ストレスをためないことだと考え、現在行っていることについて書かせていただきたいと思います。

最近、私は、花に興味を持って、休日には花がたくさん咲いている場所を探しては、見に行っています。四月は桜、五月はつつじやバラを見に行って来ました。

桜は、富岡の桜を見に行ってきました。原発事故で立ち入り制限区域のため、十年以上も見ることはできませんでしたが、十年前と同じく道路両脇に数キロにわたって咲く桜は圧巻です。見に行った当日は桜祭りということもあり、数ヵ所ある駐車場は満杯でした。

つつじは、茨城県の笠間つつじ園に行きました。小高い山が真っ赤に染まり、山頂からの眺めは、笠間市も一望でき、実に素晴らしいです。

バラ園は、福島の佐藤梨園と南相馬市小高地区の横田のバラ園が最高に素晴らしいです。どちらも個人の家で栽培しているバラ園で、たぶん福島県一、二位を争うバラ園です。

佐藤梨園は、種類の多さ、横田のバラ園は、広大な畑一面に様々な色のバラが、色ごとにまとまって咲き、見物客の心を和ませてくれます。

六月初旬には、川俣町山木屋地区の国道一一四号線沿いにある畑一面に咲くジャーマンアイリスを見に行きました。ジャーマンアイリスは、アヤメ科の植物で、黄色やピンク、オレンジ、紫などの色があり、その畑には一二〇種、四万五千株の花が咲いています。渡辺さんという女性の方が一人で栽培しているのですが、大病を克服した後、世の中に貢献したいという気持ちから、ジャーマンアイリスの栽培を始めたそうです。国道沿いに咲いているので、そこを通るドライバーの心を癒やしてくれます。自然に咲く花は、当然素晴らしいですが、人が丹精込めて育てた花も素晴らしいと思います。なぜなら、育てている人の思いが花に込められ、より鮮やかに咲くからです。花壇の構成や色鮮やかに咲いている花を見るたびに、育てる人の思いがひしひしと伝わってきます。

私は今しばらく花の観賞を通して感性を養い、花についての知識を得た後、近い将来、花を育てる側になりたいと思います。それが、今後の私のすこやかライフの展望です。

― 事務局だより ―

●第五八回県大会二本松大会
六月十二日二本松御苑

●第一回ボランティア活動
六月二十二日実施　特別養護老人ホーム「さぎそう」

●現職校長会との合同研修会・懇親会　八月二十日予定

●松風石川会懇親旅行
九月下旬予定

●第五十回東北地区退職校長協議会福島大会
十月十日～十一日　ホテル福島グリーンパレス

― 編集後記 ―

◇五月下旬のある朝のことでした。いつものようにいつもの時間に起きようと立ち上がった瞬間にめまいがして起き上がれなくなりました。横になってもめまいは止まず吐き気までしてきました。病院に行き診察を受けた結果、「メニエール病」といわれました。今はよくなってきましたが、一時は不便な生活を強いられました。健康であることがいかに大切であるかをつくづく思い知らされました。

◇今年の夏は、昨年にもまして暑さが厳しくなると言われています。しっかりと体調を管理して、健康体で会員の皆様に会えることを楽しみにしています。

◇石川支部報第百十一号を発行できましたことをうれしく思います。お忙しい中にもかかわらず原稿を執筆いただきました方々に心より感謝申し上げます。

担当　渡辺敏幸